

# スピーキング活動について

— スピーキングのプロセスとコミュニケーションの点から —

酒井英樹

(信州大学)

## 1. はじめに

スピーキングの活動について考えるとき、少なくとも、スピーキングのプロセスとコミュニケーションという2つの点を考慮する必要があると考えています。あるスピーキング活動において、どのようなスピーキングのプロセスが行われているのだろうか、また、コミュニケーションは成立しているのだろうか、ということを検討するのです。本稿では、まず、スピーキングのプロセスとコミュニケーションについて概説します。そのあとで、この2点に基づくスピーキング活動の分類を提案します。そして、それぞれのタイプの活動について、指導上の留意点や発展のさせ方を紹介したいと思います。

## 2. スピーキングのプロセスとは

スピーキングのプロセスは、大きく3つの段階に分けることができます。何を言うかを考える段階、そのメッセージをどのように言語表現するかを決める段階、そして実際に音声化する段階です。それぞれ概念化、言語化、そして調音化と呼ばれています。

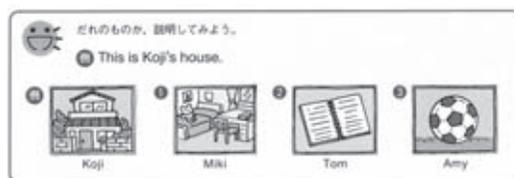
スピーキングでは、時間的制約の中で、これらのプロセスを同時進行的に行わなければなりません。生徒にとってチャレンジングな活動は何かというと、自分で言いたいことを考え(概念化○)、どのように言うかを決め(言語化○)、実際に時間的制約の中で言わなくてはならない(調音化○)活動ということになります。一方、NEW CROWN CHECK ITの「話してみよう」のような活動は、絵によって何を言うかが指定され(概念化×)、「聞いてみよう」の活動の中でどのように表現するかが指定されている(言語化×)活動(調音化のみ○)と考えることがで

き、比較的容易であるといえます。

## 3. コミュニケーションとは

コミュニケーションとは何かという定義については、一致した見解を持つことは不可能であると言われるくらい、関係する要素はたくさんあります。ここでは、単純化した見方を採用したいと思います。コミュニケーションとは、送り手と受け手の間でメッセージがやりとりされることである、という考え方です。現行の学習指導要領の中で、話すことの内容として、「(ア)強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴に慣れ、正しく発音すること。(イ)自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。(ウ)聞いたり読んだりしたことについて、問答したり意見を述べ合ったりすること。(エ)つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が续くように話すこと。」という4点が挙げられています。(ア)を除き、どの言語活動も相手の存在があり、コミュニケーションの成立を求めているといえます。

ただし、スピーキングの活動であっても、コミュニケーションが成立していないことが多々あります。NEW CROWN 1 Lesson 2 ①の「だれのものか、説明してみよう」という活動は、話し手とメッセージ(だれのものかという説明)は明示されていますが、聞き手の役割があいまいです。



ここで、生徒を立たせて、各自4つの絵につい

て英語で説明するように求め、終わったら座らせると  
いう活動をさせたとします。この活動は、スピー  
キングの活動ですが、聞き手の存在があいまいであり、  
一方通行の表現活動で終わってしまっています。そ  
の点で、コミュニケーションは成立していません。  
もし、生徒をペアにして、一人に1枚の絵を選ば  
せて、説明させ(例：“This is Amy’s ball.”)、も  
う一人に相手が説明している絵を特定させたとしま  
す(例：“No.3.”)。この活動では、話し手と聞き手  
が存在し、きちんとメッセージの授受が行われてい  
ますので、コミュニケーションが成立していると考  
えられます。

#### 4. スピーキングの活動の型

スピーキングのプロセスとコミュニケーションの  
2点から考えると、スピーキングの活動は大きく4  
つに分類できると思います。次の表をご覧ください。

		コミュニケーション	
		成立していない	成立している
スピー キング の プロ セス	容易 (単独の 処理)	A (例：本文の音読)	B (例：インフォメ ーションギャップ活 動)
	複雑 (複数の 処理)	C (例：スピーチ、 Show & Tell)	D (例：自由会話、 ディベート)

スピーキングの活動をさせるときは、この4つの  
タイプの活動をバランスよく扱っていく必要がある  
と思います。そのためには、各タイプについてよく  
理解しておく必要があります。次節からは、タイプ  
AからタイプDまでの活動についてみていきます。

#### 5. タイプA: 本文利用型

タイプAの多くは、何を言うべきかという内容  
があらかじめ設定されていたり、どのように英語で  
表現するかということが決められていたりすること  
によって、スピーキングのプロセスの認知的負荷を  
軽減しています。本文の音読、暗唱、役割練習(生  
徒が対話文を読みあう活動)、ピクチャーカードを  
見ながら本文を再生する活動などが含まれます。

タイプAの活動を行わせるときの留意点を述べ  
たいと思います。ポイントは、テキストで与えられ

ている英語について、あたかも自分がそのメッセ  
ージを作り出し、自分が表現しているかのように考え  
させることです。NEW CROWN 1のLesson 2  
Ming’s Houseを例にして説明します。久美がエマ  
と一緒にミンの家へ遊びに行く場面です。

Kumi: ① This is Ming’s house.

② Hello, Ming. ③ This is Emma.

④ My friend.

Ming: ⑤ Hello, Emma. ⑥ Hello, Kumi.

役割練習では、本文の英語を覚えて、セリフを言  
い合うという活動をします。そのときに、状況(ど  
こで話しているのか)を具体的に想定させ、登場人  
物の立ち位置を考えさせ、視線や動作もつけさせる  
のです。①の英語を言うとき、久美はどこにいて、  
どんな姿勢なのでしょう。Thisと言っているの  
で、ミンの家のすぐそばまで来ていると推測できま  
す。エマと久美は一緒に歩いてきたわけですから、  
おそらく並んでいたと考えられます。ミンの家のと  
ころまで来て、エマに説明するために、家に近づき、  
エマに振り返って、“This is Ming’s house.”と  
説明しているのかもしれませんが。あるいは、二人並  
んできたわけではなく、久美の方がリードして、エ  
マを案内してきたのかもしれませんが。というのは、  
③と④の“This is Emma. My friend.”と久美が  
ミンに紹介していることから、エマとミンは初対面  
であるとわかるからです。エマは初めて会うミンに  
不安を感じていたかもしれません。そう考えると、  
⑤のミンの“Hello, Emma.”という一言は、ミン  
とエマが友だちになる第一歩の重要な挨拶であった  
ことがわかります。“Hello, Emma.”というとき、  
ミンはエマの方を見て微笑んだかもしれません。テ  
キストには書かれていませんが、エマだって“Hello,  
Ming.”と挨拶したはず。このように、生徒に  
場面や登場人物について考えさせ、動作をつけて英  
語を言わせることで、機械的な調音化の練習ではな  
く、発音やイントネーション、ポーズなどに気持ち  
を込めて音声化する練習へと変わります。

タイプAの活動は、だれに対して何のために話  
しているのか(あるいは、聞き手は何のために聞く  
のか)という目的を明確にすることによって、タイ  
プBの活動に発展します。また、本文を利用しな

がらも、自分で伝える内容を考えて英語で表現することによって、タイプCの活動に発展します。*NEW CROWN 1* Lesson 6のUSE IT 1「友だち紹介」を取り上げます。この活動では、「洋が外国人講師の先生に友だちの写真を<sup>ひょうし</sup>見せて紹介しています。例にならって、洋になったつもりで友だちを紹介してみよう。」という指示と、“This is a picture of my friends. This is Yasushi. He plays baseball. He likes it very much.”という例と、スポーツの道具や楽器を持った5人の絵が与えられています。



この活動をタイプBに発展させます。ペア活動にして、一人には教科書を見させ、もう一人には名前の部分を消した絵を与えます。友だちを紹介してもらいながら、名前を記入するように聞き手に指示をします。このようにインフォメーションギャップ活動に発展させることができます。



あるいは、タイプCに発展させることもできます。生徒に友だちの写真を持ってこさせて、洋のように友だち紹介をさせます。これは、言う内容や表現方法を自分で考えなくてはならないので、タイプCに該当します。

## 6. タイプB: インフォメーションギャップ型

タイプBの活動は、いわゆるコミュニケーション活動ですが、「例にならって対話をしてみましょう」というモデルや、絵や表が与えられ、言う内容やどのように表現したらよいかということがあらかじめ決められている活動です。*NEW CROWN 2*

Lesson 5 Speech — “My Dream”では、USE IT 1で「将来の夢を話してみよう」というインフォメーションギャップ活動があります。「例にならって、将来どんな職業につきたいかを友だちに聞いて、その結果を下の表に書いてみよう。」という指示があり、例として、

自分: What's your dream?

由美: I want to be a teacher.

自分: That's nice.

というモデルが与えられています。

タイプBの活動を行わせるときの留意点を述べます。モデル対話のあるインフォメーションギャップを行うと、実際には生徒はどんどんとセリフを省略してしまいます。これは、相手が何を言うか、また、どんな表現で言うのか、モデル対話によってわかっているからです。つまり、teacherなのか、doctorなのか、あるいは別の職業なのか、という部分だけが新情報であり、そこだけやりとりできれば活動が達成できます。相手が、“What's your dream?”と言うべきところを、“What do you like?”と間違えて言ってしまったとしても、気づくことなく、“I want to be a teacher.”と答えることができるでしょう。つまり、インフォメーションギャップの部分だけはコミュニケーションが成立しているのですが、他の部分はコミュニケーションが成立していないということになります。この問題を打破するには、モデル対話の中に、3つぐらいの質問(“What's your dream?” “Do you want to be a teacher?” “What are you going to do in the future?”)を提示し、どの質問をしてもよいと指示を与えるのです。そうすると、質問に応じて答えなくてなりませんので、しっかりと聞くようになります。

タイプBの活動から、モデル対話をなくし、自由に話すように指示を与えれば、タイプDの活動へと発展します。

## 7. タイプC: スピーチ型

タイプCの活動には、スピーチやShow & Tellの活動が含まれます。このタイプの活動は、自己表現を主目的にした活動とも言えるかもしれません。

自分のことについて考えて、どのように表現するかについてはテキストの表現を参考にして、発表を行います。*NEW CROWN 3*のDO IT WRITE 1の「扇子<sup>せんす</sup>」を説明してみようという活動では、自分が紹介するものについて英作文したあとで、スピーチをする発展活動があります。モデル文を参考にしながらも、自分が伝えたい内容を表現していく活動です。

タイプCの活動を行わせるときに気をつけたいことは、「扇子」の活動のように、概念化（何を言うかを考えること）と言語化（どう言うかを考えること）のプロセスをライティングによって行うことが多いため、時間的制約のない活動になってしまうことです。また、プレゼンテーションのときには自分のペースで用意した原稿を読み上げることができますので、調音化のプロセスも比較的時間のプレッシャーがない状態で行われます。そこで、時間的制約のあるスピーチ活動を行わせることも必要です。「扇子」の活動で、各自が選んだものについてスピーチ(planned speech)の発表会を行います。そのあとで、それぞれが選んだものの名前をカードに書きます(例: *Yukata, Fireworks, Furin, Sensu*など)。そして、1名指名してカードを引かせます。その場でそのカードに書かれたものを英語で説明するように指示します。これは言ってみれば即興的なスピーキング活動(impromptu speaking activities)です。スピーチのあとで行えば、友だちが発表した内容や表現を参考にすることができ、認知的負荷を軽減することができますし、唐突にこのような即興的な活動を行えば、時間的制約の中で概念化・言語化・調音化をさせる練習をさせることになります。

タイプCの活動は、聞き手の役割があいまいです。「自分の夢についてスピーチをしよう」というスピーキング活動はよく行われますが、何のためにスピーチをするのか、また、聞き手はいろいろなスピーチを何のために聞けばよいのか、という点が不明なことが多いです。この聞き手の役割を明確にすることによって、コミュニケーションを成立させ、タイプDへと発展させることができます。例えば、上記の即興的な活動で、他の生徒たちに説明されているものをあてさせれば、聞き手の役割がはっきりし

ますし、話し手も聞き手にわかりやすいように説明しようと努力できます。

## 8. タイプD: チャット型

タイプDの活動は、いわゆるタスクです。チャット型活動としましたが、少し誤解を招いてしまうかもしれません。チャット型活動という名が指し示すよりも幅広い活動を含みうると考えるからです。時間を共有して会話を楽しめればよいというような自由会話活動、問題を解決するために話し合う活動、あるトピックについて様々な点から検討するディベート、役割と状況だけ決まっているロールプレイングなどが、タイプDに分類されます。いずれにしても、生徒は概念化・言語化・調音化というプロセスを時間的制約の中で行っており、話し手だけでなく聞き手の存在が明確であり、2者の間で情報の授受が行われることがタイプDの活動の特徴です。

タイプDの活動を行わせるときの留意点は、中学校1年生の段階から少しずつこのタイプの活動を行わせることです。生徒によっては、単語だけでコミュニケーションするかもしれませんが、または複雑な英文をつくるかもしれませんが、あるいは、ジェスチャーなどの非言語的な手段に頼って活動を行うかもしれません。この活動の利点は、実際のコミュニケーションに近い言語行為を生徒に体験させているということです。実社会に出たら、自分の持てる力を最大限使うしか方法はありません。タイプDの活動は、まさに自分の持てる力を十分に発揮する練習をさせているといえます。

英語教師としては、生徒の力を評価する良い機会にもなります。タイプA, B, Cでは、テキストやモデル文が提示されているため、生徒が独力でどの程度の英語力を持っているのかが見えてきません。タイプDの活動で、生徒の力を見極め、その後の指導に活かしていくことができます。

## 9. おわりに

スピーキング活動では、どのようなスピーキングのプロセスを行わせようとしているか、また、コミュニケーションが成立しているかという点を教師として自覚しながら活動させたいものです。